

点鬼簿に入った人は生き続ける

—小田実さん死去から満5年になって—

吉川 勇一

「点(點) 鬼簿」とは、亡くなられた方の名簿のことだ。例えば、「九条の会」の呼びかけ人の点鬼簿といえは、小田実、加藤周一、井上ひさし、三木睦子さんということになる。今年の7月末で、小田実さんが亡くなってから満5年になり、東京では、7月15日に、没後5年シンポジウム「小田実のデモクラシーと希望」と「偲ぶ会」



のパーティが行なわれ、シンポでは子安宣邦、島本慈子、山口幸夫、玄順恵の4人の方がたが小田さんのデモクラシーに関連して報告され、また、その後のパーティでも多数の人が小田さんについて語った。

この話を聞き、また、私自身も短く話をしたのだったが、それでつくづく思ったのは、今も生きている私などは、毎年歳を取るにつれ、デモ参加もだんだんきつくなり、耳は遠くなり、そして判断や理解が次第に困難に

なっている。身体上の歳だけのことではない。優れた人びとは生きていた時に語り、行動したことが、今もなお、そのまま生きて残っている私たちに、まさに今の事態を適切に訴える力を与えてくれるのだ。

毎年7月に入るとNHKは『小田実 遺す言葉』(坂元良江プロデューサー)という1時間半のハイビジョン特集を放映する。毎回これを観るたびに涙が止まらないのだが、そこで小田さんが強く訴えていることは、3・11以後の現在にまさにそのまま妥当するのだと確認できるのだ。この番組をご覧になりたい方は、本会事務局へご連絡を。DVDをお貸しできます。

「市民の意見30・関西」や「山村サロン」などを中心にした「小田実を読む」会は、毎月小田さんの文を読み、意見を交換する集まりを続けており、すでに40回を超えており、「りいど みい」という140ページもの立派な機関誌も出されている。4月発行の第3号は

なつてゆくのだけれど、点鬼簿に入った人びとは、そのまま歳は留まり、小田さんは今も75歳

なつてゆくのだけれど、点鬼簿に入った人びとは、そのまま歳は留まり、小田さんは今も75歳



「東日本大震災」と「小田実のデモクラシー」

の2つの特集になっており、小田さんの未収録のインタビュー「極限状況を描く」も掲載されている(この号、700円)。関西の方は、この集まりにぜひ参加してみたい(電話0797-13812585)。「小田実を読む」電話0797-13812585)。

昨年11月だが、岩波書店から鶴見俊輔・小田実共著で『オリジンから考える』という本が出版された。帯には「ユーモアあふれる歴史的架空対話……」とあるが、この本では鶴見さんが、すでに点鬼簿に入っている小田さんと対話されているのだ。まさに「点鬼簿に入っている人は生き続けている」ということの具体的な一例だろう。

最後に、小田さんを偲ぶ会で私が話したエピソードを紹介。色川大吉さんが最近書かれた、色川さんとしての点鬼簿に入っている文章だ。

……小田が玄順恵と結婚するとき、「きみは代表なのだから、式にきて挨拶をしてくれないか」と頼まれたことがある。「神戸まで行く余裕がない、祝電を打つから」と断ってしまったが、悪いことをした。小田はめずらしく遠慮しながら小声で懇願したのに。神戸への日帰りぐらいいなんでもなかつたはずなのに。順恵に惚れていた小田は傷ついたらう。……

夫人の玄順恵さんが大笑いされていた。(よしかわ・ゆういち/本誌編集委員)